小説作成日和（オハナシサクセイビヨリ）

凪沚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小説作成日和（オハナシサクセイビヨリ）

【Ｎコード】
Ｎ２１５８Ｄ

【作者名】
凪沚

【あらすじ】
変わることなく日々過ぎていく生活の中、その中で僕は少しづつ変わり始める。名前も知らない君と始める小説作成（オハナシサクセイ）と共に

第1話：僕の幸福（前書き）

長編になる予定です。

第1話：僕の幸福

寒さが増し、秋の色合いが濃くなっていく日々の中、僕は空を眺めて白を吐き出すことを主にして生活していた。

「はぁ」

溜めて吐き出した息は白く曇り、宙に混じり消えた。

誰も居なくなった放課後の教室は寒さが異常だと思った。

用意された古い型のストーブは、組み立てすらされておらず教室の隅に固められていた。

「はぁ」

ため息をすると幸福が逃げると誰かが言っていた気がする。

僕は今日で何度目のため息を吐いただろうか？僕の中に残っている幸福は、きっと些細なものだろう。

例えば、百円拾ったとか、くじ引きで五等の洗剤が当たったとか、家に着いてから雨が降り出したとか、その程度のものだろう。

そしてこれもその一つだろうな。

僕は鞄の中を漁ると、昨日買ったばかりの文庫本を取り出した。

この本は僕が好きな作家さんの新刊で、何日も前から捜していた本だ。

あまり人気の無い作家さんなのだが、独特の表現と色鮮やかな言葉が好きで、新刊が出るたびに買っていた。

今回も新刊が出たとの情報が耳に入り、早速行きつけの本屋に向かった。

「えっ？　入荷してないんですか？」

「申し訳ございません。　問屋の方には在庫が有るようですが、注文されても一週間以上かかってしまいますね」

どうなさいますか？と本当に申し訳なさそうな声を今でも覚えている。

その店で注文せずに僕は家路に着いた。

次の日から学校終わりのその脚で本屋巡りが始まった。
学校から近い本屋を中心に捜し回ったが一向に見付からない。
遠いところでは学校から歩いて一時間はかかる場所にまで赴いたが、どこの店の答えも
「入荷していません」、
「うちの店では取り扱っていません」と、本屋自体に品物が置いていない状態だった。
本屋からの帰り道は後悔ばかりしていた。
やはり最初の店で注文しておくべきだったのかと。
でも一週間以上かかってしまうのはあまりに長い気がした。　しかし、あのとき頼んでおけば自分の手元になどと考え過ごし、もう一週間は過ぎてしまっていた。
一週間と三日過ぎた放課後、今日は最後の本屋を捜す予定だった。
けれども、日直の仕事があり今日は捜しに行けないなぁーと、ぼんやり考えていた。
黒板を消して、教室を掃除し、机を綺麗に並べ直す。その後、日誌に今日の出来事を洗いざらい嘘偽り無く書き出していく。
「今日は朝から日直の相方が居ないことに不安で仕方なかった。
先生が入って来てからの、クラス全員で発する
「お願いします」の先陣を切るのは胃が痛むものがあった。　いつもは相方に、そちら方面をやってもらい、自分は目立たないことをやるのが楽だったし、好きだった。　何故こんな日が訪れてしまったのだろうか？　とことん日直が嫌いになりました。　ため息も何度目か分からなくなりました。　とにかく今日が無事に終わってくれて良かったです。　欠席、松月和音、早退、なし、日直、　瀬川秋。
「はぁ」
日誌を書き終えると共に、ため息が溢れた。
そのことを日誌の隅に書き足し、今日の学校で行う全てを終了した。

第2話：僕のため息

やっと終わった。
時計を見ると、六時を過ぎたところ。
伸びをして、決まり事のように息を吐く、今から帰って家に着くと二十分頃かな…。
帰り支度を済ませ二階の職員室に向かう。
階段を下りながら、日誌の内容を反芻した。
まずかっただろうか？あまりにも日誌らしくない文章、適当さを指摘されて書き直しを命じられないだろうか？
せめて最後に付け足した言葉は消しておくべきだっただろうか？
一人緊張しながら職員室に入るが、担任の荒井は不在だった。
胸を撫で下ろしたついでに、日誌を叩き付けておいた。
職員室から出て、玄関で靴を履き変える。
木製の下駄箱に内履きを突っ込み、外の空気を感じる。
吐き出した息の白さが二割増ししていた。
首に巻いた安物のマフラーをぎゅっと強く巻き直し、僕は玄関を後にした。
校庭では、この寒さにも関わらず部活に汗を流していた。
皆が声を出し合って、汗だくになって、顔をくしゃくしゃにして頑張っている。
青春だなぁー…、自分にはこの先も
「青春」と感じることは無いだろうな、僕はそれらを横目にマフラーに顎先まで埋め、その場を立ち去った。
校門を過ぎさると、タイミングを計ったように携帯が震えた。
珍しい。メールかな？
携帯を取り出すと、折り畳まれた携帯はライトを光らせ、小刻みに震え、着信の二文字を小さな画面に浮かべていた。
開いた画面には

「着信　本屋」と書かれていた。
何か予約してたっけな？
「はい、もしもし？」
「あっ、すいません。　こちら大地書店の池内と申しますが、瀬川様のお電話で宜しいでしょうか？」
あの時の店員さんだ。僕はこの声に聞き覚えがあった。
「はい、そうですが？何か予約してありましたっけ？」
「あっ、いえ、そうじゃなくて、先週いらしたときに文庫本を探していたと思うのですが、もうその本は他の店か何かでお買い上げになられたのでしょうか？」
何を聞いているのだろうか？話の狙いが全く掴めない。
「あの、実は先週お帰りになられた後に、こちらの方で注文する機会がありまして、もしまだお探しのようでしたら当店の方に少しですが在庫がございますので…」
「ほっ本当ですか！？　分かりました。　すぐに伺います」
「ありがとうございます。　取り置きしておきましたので、カウンターの方で受け取って下さい」
予想外の展開に少しうろたえてしまった。
僕はマフラーに口元まで埋め、笑みを隠しながら本屋に急いだ。
本屋に着くと、電話をしてきたあの人は居なかった。
「すいません、取り置きをお願いしている瀬川と申しますが…」
やる気が無さそうな男の店員は、お待ち下さいと発しただろうか？あまり声が大きくないので上手く聞き取れない。
彼は本が取り置きされている棚を漁り出した。
そのうち見付けた品を目の前に出し、こちらで宜しかったですか？と、それにしても接客態度が悪いな、愛想も糞も無いんだな。
あの人…、池内さんだったかな？池内さんを見習ってほしいものだ。
本を買い終え、外に出ると辺りは暗くなり始めていた。
鞄に本を詰め込み家路を急いだ。

マフラーを緩め、暗くなりつつある空を見上げて歩く。
「はぁ」
僕の些細な幸福。
ぼけっと教室で思い出を繰り返す。
何だか今まで幸福なことが無かったようで悲しくなる。
きっとそんな幸福も、どこかに置き忘れてしまっただけで、家の中を隈なく捜せば僕の幸福ぐらいごろごろと転がっているはず。
それにしても今回は運が良かった。
文庫本を手に顔が緩む。
「気持ち悪いよ」
声の方に顔をやると、教室の入口に一人の男子生徒が立っていた。
「何にやけてんの？」
誰だコイツ？ってか失礼だな初対面の相手に気持ち悪いだなんて…。
「いや別に」
あまり関わらないようにしよう。
見た目で判断するのは良くないが、あまり良い印象が伝わって来ない。
ぼさっとした焦げ茶色の髪、だらしなく統一された衣服、何を考えているか分からない雰囲気。

第3話：僕の色合い

近寄りがたいオーラを全身に纏っている。
「その小説面白い？」
何を聞くかと思えばそんな事？
「面白いですよ」
何が気になる訳でもないだろうに…。
僕は明らかに暇潰しの相手をさせられている気がした。
「そんな文字の多い本よく読めるね、俺すぐ飽きちゃうよ」
声は少し低めで高校生にしたら落ち着いた綺麗な声に僕は聞こえた。
「声は落ち着いてるね？」
「褒めてんの？」
彼は、教室の中をキョロキョロと見回しながら、一歩また一歩と歩みを進めた。
「俺、明日から通うんだよね。　この学校に」
「転校してきたの？」
「まあね」
通りで知らない顔だと思った。　こんなに、不自然な存在なら僕の脳裏にこびりついているはずだ。
彼は机に触れたり、窓の景色をぼんやり眺めたりと、落ち着いているのかいないのか分からない。　突然動き出したかと思うと僕の隣に座り、またぼんやり外を眺めた。
「はぁ」
吐いた息は白く消えた。
なかなか集中出来ない。
知らない人が一人いるだけで、こんなにも集中力が削がれるとは気付かなかった。
鞄に本をしまい込み、立ち上がった。

「あれ？　帰るの？」
「帰るよ」
彼は意外そうな顔をして、何故か僕と同じく立ち上がった。
椅子を机に押し込み、教室の明かりを消して廊下に出た。　その間、彼は僕の後ろでのらりくらりと着いてまわった。
「何？」
「いや、俺も帰ろうかなって」
階段下り、一階の保健室前を歩いていると、だんだんと寒さを感じる。
忘れていたマフラーを取り出し首に巻く。
「はぁ」
そして吸い込む。
玄関に付くと、出したままの真新しいスニーカーが転がっていた。
緑を基調としていて、地味な僕は明るいその色を見て少し感動した。
彼はそれに足を通し、何故か僕が履き変えるのを待った。
「何？」
「いや、何となく」
意外にとは失礼かも知れないが、優しい人みたいだ。
それぞれの行動に意味があって、僕が意味もなく空に吐き出す白とは違い、何かを意味する動作だったり、それの伏線になるように動いている気がするのは僕の気のせいだろうか？
それでも、今この状態は赤の他人にしては
「優しい行動」
として僕は受け取ってしまう。
「ありがとう」
「うん」
口にして、何を言ってるんだろう？恥ずかしくなりながらも立ち上がり、僕等は玄関を後にした。

第４話：僕の距離

玄関を出ると寒さが日を経つごとに尖っていってるのが分かる。
今日もグラウンドでは部活を頑張る生徒で溢れていた。
「はぁ」
変わらない日常、何の変化も訪れない生活、たぶん僕は飽きている。
部活を始めれば何か変わるかと考えたが、部活を始める根性も無く、何かを目指す努力もしない。
でもゲームを朝方までやるような根性は発揮し、周りから嫌われないような努力はしてる。
僕は所詮そんなもの。
人に誇れるものは何も持ち合わせていない癖に持つ努力もしない。
そんな物があっても自分には必要無いとか、そもそも興味すら示さないのが僕である。
「部活とかしないの？」
「興味無いから」
聞かれて即答した。
野球部の声が大きく枯れていて耳障りだ。
おまえら全員が野球選手になれる訳でもないのに。
マフラーに顎先を埋め早足で歩き出す。
「どうしたの？」
聞かれても答えが出せない。自分でも分からない苛立ち。
きっと何かを頑張ってる姿が嫌いなのかも知れない。
「家どっち？」
「俺こっちだよ」
「どこら辺に住んでるの？」
「この先にあるコンビニの裏らへん」
「途中まで一緒だ」

校門出て右に真っ直ぐ歩くと神社があり、その先を真っ直ぐ行くとコンビニがある。
僕は神社を曲がって数分のとこに住んでるから地区は一緒になりそうだ。
取りあえず神社まで一緒に歩く。
その間も彼は一人で話し続け、話し相手には相応しくないだろうになと考えながら相槌を打つ程度のことしか出来なかった。
別に話したくない訳ではないけれど、話したい訳でもない。
あまり興味が無いだけで、今日が終われば彼とも話すことも無いだろうし、そんな彼に気を使う必要も無ければ自分を教える必要も無い。
「じゃあここで…」
「家どっち？」
「こっち」
指を指すと、ふーんと顔が声を出した。
赤い鳥居を前に別れを告げ歩き出した。
「名前も教えてくれないのー？」
「興味無いから」
「俺の名前は高橋要、覚えといて」
「興味無いし」
小学生みたいに姿が見えなくなるまでばいばいを叫んでいる気分だ。
だんだん遠退いて行き曲がって彼の姿が見えなくなったときに響いた言葉。
「明日学校でな」
「興味無いし」
僕は零すように呟いた。
アホだな。
明日学校休みなのに。
懐かしい思いを感じた。これから少しだけ日常が変わる気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2158d/

小説作成日和（オハナシサクセイビヨリ）

2010年10月28日05時20分発行